



研究テーマ： 住まいと自然・都市についての場所論的研究

研究者： 島岡 成治

SHIMAOKA Seiji

(工学部建築学科 教授)

【研究・開発の目的】

優れた建築、魅力のある都市には、過去から未来に向けて歴史的な意味を見出すことができ、日本においても、変化する自然との場所的な係わりの中にいくつかの特徴的なあり方を見ることができ、近代化の中で大きく変化してきたとはいえ、都市や建築のそれぞれの場所的あり方の特色とその可能性を明らかにすることが目的である。

【研究・開発のきっかけ】

日本の建築と都市は、明治以降西洋文化を受容し、大きく変化してきたが、その受容を可能にした近世知識人たちが大分にも存在した。三都とつながりをもつ彼らの住まいや自然・都市について、詩や記や絵画からその場所論意味を考察してみようと考えたのがきっかけである。

【研究・開発の概要】

三浦梅園、帆足万里、脇蘭室、田能村竹田、広瀬淡窓・旭荘など近世中後期の儒者・文人の詩や記を手掛かりに、またその住まいや塾の遺構や跡、その周辺の地形を参考としながら、その住まう場所とその周りの自然あるいは都市的場所との係わりをそれぞれに明らかにする。そして、その変化を考察し、自然および都市の場所論的意味の変化を明らかにするものである。また、竹田と深い関わりがあった頼山陽によって「海内第一」と言われた「耶馬溪」に関するその後の図巻、画帖、写真帖とそこに書かれた詩や記によりながら、「耶馬溪」の風景の変化を明らかにする。この研究は、さらに大正4～5年の「新日本三景」、昭和2年の「日本八景」における耶馬溪を論じることで、日本の風景の視方の変化を明らかにする。

【研究・開発の特色】

文献など歴史的史料の読解と考察によりながら、日本の都市や地方の場所の意味とその変遷を論じるものであるが、それぞれの場所の現在と重ね合わせることにより、未来への可能性を模索するものでもある。

【今後の展開】

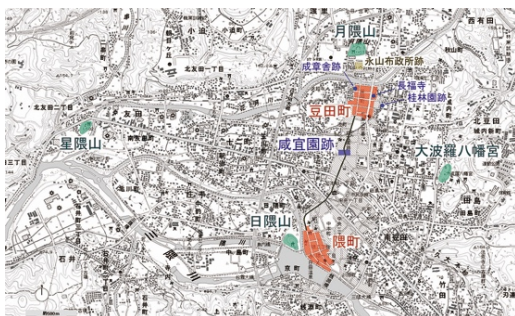
近世儒者・文人を出発点として、住まいや都市、自然の場所論的意味づけの変遷を考察してきたが、彼らが実際に生きた場所の歴史的変化を考察する必要がある。大分には城下町、在町、門前町など魅力的なまちづくりの可能性のあるまちが存在する。これらについて地形など自然との係わりを含めた歴史的成り立ちを明らかにするとともに、近代以降についても具体的に場所としての意味論的变化を考察したい。

【今後の課題】

近代以降について、地図や史料によりその物理的变化に大きなものがあることは容易に確認できる。この変化を場所論的に考察する、すなわち、その評価と可能性について論じることが課題である。

【その他の情報】

活用した助成金：科学研究費補助金（平成16年度～平成18年度）



（日田・咸宜園位置図）



（三浦梅園旧宅－背山臨流と両子山への軸線）

【地域・企業へのメッセージ】

明治以降の急激な人口増加時代が終わり、逆に人口減少時代に突入した現在、様々な問題がまず地方の都市やまちに現れています。このような前代未聞の時代では、私たちは私たちが住んでいる場所の価値と意味を、その歴史や自然を含めてもう一度見直すことが必要ではないでしょうか。それは、単に新たな観光資源を再発見するというだけではなく、先達たちがこの場所に生きた意味を確認することにより、また新たに魅力的に生きる意味を見出そうとすることだと思えます。地域、可能であれば企業の方々と一緒にそのような意味を考えることができればと考えています。